



No.

紀行三千里



紀行三千里

いかめしく旅立事ありて行誠や心しる友  
 は水のこどく久しうして猶申かしければ道よ  
 り横さきに馬ひきむけえ秩父の郡寄居にいた  
 る此日は雨くらく神あれて山風は木も折ぬ  
 く道おろれ日くらにたりあるし艸羽を夢と  
 のみ喜ぶ社中誰彼きたる  
 一つの世の春ありけん此あるし鶉籠を作り  
 ていまた半ありしに我来りてし



棟揚の垣からひくし山櫻

といひしを忘れたりしか  
柳羽覺えて語る今は  
造りおさめまたれと

攔干に立とも高し雲の峯

あけくれの空さをためあき  
に鳥川打越してより  
八重立山のそこはゆとあき  
茂みの末にやとる

みしか夜や切れ行木曾の山のつら

煙かぐら曲けく減間の風涼し

誠に風涼しく郊の花今を  
つほみかち草みし  
かす青みく麦も漸あからみぬ

塩尻峠に腰打かけ

富士の東へうつれば諏訪も清水哉

枯裡の原

あかし軍此處に碓氷で唯一将の名や申し  
かりし夫さへ草の原と成ら、假居の陣とあとの  
みあり

田へ配る水の指圖も團のあ

負て散旗色もあり雲の峯し

句は心の物にみれて起るある  
し春は花咲雪  
残りてたましく柳の青からん  
よりかの柿とあ

たには過ぎし秋は猶いふくもあらず是る事と  
あき夏のみ山のおあし谷川の岨をうたふて今  
日七山路けふも暑しとてくるしみ行ほとに日  
敷つたり美濃さへ山路かちにおほえて近江七  
過ん

加茂川新涼

大路まらきたりて伴ふ

夜の顔雪とみありく涼かお  
水極は風も晒して涼かお

いつ北にのさため侍らん

角のあい石と着合ふ涼かお法大路  
川風は人にたまるすのみ哉同寛次  
水無月十五日二子送りて都を出る  
淀のあちとを過て

淀河をへらすも涼かお水車

いまは四とせはめりも立ぬ九国の旅宿思立て  
浪花の浦よりおほつかあき舟にうつり伊豫の  
国志山か亭に遊ひし今宵ありしかそれより  
いつのとしあけん都にありて故人ハ儼観に  
集り飲む能浦の司鮎も生十てはありしあとお

も一は多くの人も失せぬ月は只かはらて限  
きに

旅て見る命も夢や水老月

備浪花より舟出して川にわくる何事もおも

い出ぬしし

その頃もおそろしかりし波出きて横さあは吹

けと船子とよく馴て沖のわたへ追ふ程に

室に着祀事の月も出ぬへき頃あり

名にしおふ室君の舟にうつりてうたふみしか

うしてあけぬ

楫に寝て枝は長し 夏の月

音頭の瀬戸

友は清盛の山を僻て海を通せし處とあん或は

翔る潮をにらみてこれより波こさしとりひけ

んあたり古き碑はありともみえたり西岸物い

みはかりに隔り立て木高き森の楯猶深し

蟬あれてわたつく山や右りたり

夏鳥

おわたの浦より舟かりて渡らんとせし時風む

かゝてむとくに過けんおもひ出るに弥生のは

巖島の絵

しめありしか

いさり火かゝれか霞のいつくしま

とばかり遠拜して又いつかはと思ひ過ぬるに

はからずもけふ爰にさたりてあちかくぬか

く中世事の不可思議にもたふとくて涙も落ぬ

へし何事も祈る事はあれと舟より行身あれは

只生きてかへらんこそたのもしかへりぬ  
追風をいのれは涼しいつくし

登瀛山

月もいよぬ 西紅に夏木立

これより柳か浦に船をおせて阿弥陀寺に登り  
は木立物あり夏柳もいと高きに

蚊屋釣らぬ 都て悲し波板

豊前にあたるは夏も過ぬ

羅漢寺

肌入たる羅漢もあがりて今朝の秋

宇佐八幡

猶凍し夏越ぬあすの夕嵐

こしわた遠く成行ほかに今入筑紫の道おほつ  
かあし

西へ出る月道つめて旅寐哉

七夕彼岸ソノキにやとる

西花坊が筑紫行に今宵はそとに希あるを

夕の夜ありけりし切るに風あはたしく吹て

雲のたゝすまひ雨を催すを書るも長崎ちかき

舟の中あらん今宵此やとりよめさまた異あら



月七いふや西く水あるに夏木立  
 吾徒難して曰佈師此句ある日を討るに月の  
 末あらん一古きに東白<sup>口</sup>といはんとして親  
 行の實境を失へるいと口<sup>口</sup>羽曰月あき  
 頃の五文字實に實境を盡せし彌山の眺望東  
 西をきはめ波にひたせり夕日にあかひて月

彌山<sup>之</sup>吟を評する辞

中羽

ねは  
 天の戸や雨にほそめて二層  
 壁を隔て臥たるおのこもはみあ旅の人あら  
 ん此句を聞て古里恋しと語り出せるも毒やあ  
 るらんにと猶あはれにおほえぬ

長崎

入舟やみお唐土の秋の風

まもいまや出るころまらんとあり凡無心の風  
流における眼前の佳景魂に（みて目を忘れ  
たるはたふとかくらすめ若月も出ぬおといは  
、句もかきりたくとせん珠更いまゆの働さ  
かりて西は夕陽のけしきと作り南は青き夏  
木立も吹くる風もさそあらんといひて同士  
相見え笑ふ莫逆旅心

寒葉齋建委岱字孟喬為漢画業又遊  
俳諧呼吸露菴涼依後為以片歌  
一家者流更書綾太阿也多理安永甲午春  
三月十八日没寿五十六葬葛飾牛頭

禅林

(人物)

華盛寫

吸露菴涼俗画と誅をもて世に鳴後片歌に遊て  
又一家をある是予か前の誅師也さりや物故し  
て七とせ終焉の今日をおもは花眼にくちり  
鳥耳にかあし明生建思明表のぬしとありて藤  
衣うすせ契りさうらみ書肆醉知棺を菴寄に較  
し夕烟立かへらさるるを悔むかく過て碑を營  
み一周をむかへて回を布ふに也此二子事とと  
りしか酔知は去年の夏思明はあしく冬師か  
あとも追々隅田河のすくしき国に身まかり申  
きけり<sup>い</sup>鳴呼可惜可傷

寔に此稿は 宝曆甲戌の秋涼師長崎下向の目  
記あると武山の妙羽梓行の志ありて剗剗に命  
すへくものせしにありは此の事にかくりてふ  
らさる中彼も亡人とありにき共稿めくりてや  
つゆれか文くるまに傳はれるか月七いあやの  
言葉西方に明るく三千里の標題諸佛の數にか  
あひて追福の掬あれは印本とあし法蓮の布施  
にかへあ事をあむ猶これゆ水の雲の手向に  
もとじも終日花百句を喰し捻香して後に供す  
于時字永九多度子二月十八日

花の前は春や昔のひとり言  
 眼にて見るものかは花に琵琶法師  
 淀舟や朝東風をとる花はをけ  
 月午や只一面に花の晝  
 道かへて廻り大師や花の奥  
 寂しから花もそほ降雨の日に  
 城跡に馬場のあたりか花並木  
 虚無僧のたつや花是の留守の門

題花

存土神田五池一陽井素外漢書

女はぬ也花に七人に山路とて  
 蓮しく原何ほと花の陰  
 花咲て植替一氣と林のサリ  
 無事かまを昔若木の須磨の花  
 蝶々にくるはかされてちるや花  
 花瓶の花や識に大書院  
 ゆらりく京を花見て歩行せり  
 みつくし花屋か廊の旭請  
 くらあれば春はすくおし華の山  
 花ほのか此ささるきの望月夜

枝の雪に届くや泊瀬の花  
 眼をとちて休む花のよしの山  
 又あたらし一風散すあとの花  
 廿日はかり積る日数や花の雪  
 はつ花の天氣や四つの日さしより  
 被着て花は提たり御所廿中  
 芝に躰供人ともか花むら  
 ものいはぬ花とは是か野に一本  
 下馬札も花ある奪の備へ哉  
 花守も花くるし氣や酒の友

妻子連て出ししいと日をや春の花  
 初花やまゐありしと残る月  
 殊勝ありしと一の花の老て猶  
 晚鐘にいつくともせし花さかり  
 水茶屋もふるは涙か花に雨  
 花提へ胡蝶にあそを連れぬる  
 さかりにも人静也花原山し  
 ちれ歳の風より軽し花の枝  
 襟袖にいれとや向ふ花吹雪  
 花の雲降しき雨をかくしけり  
 さく花に忍びかへし奥表  
 久しむる人に逢たり花の空  
 弾けうたへ念佛してき人踊る花  
 此花にうしろ見せせよ常念佛  
 月は今みる汐風や花の波  
 八重は肥りしと人は瘦つ雨後の花  
 あたら花を人にも見せず藪屋敷  
 圓かきや朧月夜の森の花  
 花見衆に日和の音や通町  
 松杉の類ひや花の深山人

蜂の巣も折あら花の守りかお  
 花あはれ志願は幸きへ家居さへ  
 湖水渺として花野ふる山くたり  
 かたちよき花咲にけり鞠かり  
 生神む花の初々の見しこゝろ  
 日晝の花にまほゆし談義鉦  
 危しや風に一木の岨の花  
 花の陰に休めても是た(黒木)り  
 ひやりく花の雪ちる水の上  
 しろこしのおよ(野)を夢に花の時  
 大津にや夜はしらみけり旅の花  
 鶯の宿下り待か谷の花  
 頃は花遊ひあはらるの帆かけおね  
 権人とす鐘に匂ふや花の風  
 降かゝる花や幸ひぬれ佛  
 花見する人の味方や夕月夜  
 かはらぬそことし花の飛鳥山  
 都邊や花に御見の肩車  
 四方から不盡もかすむや花山く  
 咲にけり只ほらとりと里の花

花も宵 月も宵也 若い同志  
 植溜の花や 氣樂に 嘆みたる  
 ちふ其袖は こゝろのにては花の幕  
 蛇の音 花を 閉かに 見ると 日か  
 花 悠然 若きりと ありよりの 河  
 子に 毛食させるか 花に 御浪人  
 いとさらは 花に 何をか かくし  
 時 ありや 花には 笑ふ 鳥部 山  
 土か 誰 此花 折る かくる 札  
 池に 葩煎 ちるや 彼岸の 場の花

林間に 冷酒もよし 花日和  
 東やま 花に 鳥の音や かくれむ  
 さくや 八重に 藏の隣 の 壻の花  
 愛相に ちるから 休らふ 花の陰  
 初花や 山の井もまた ひとへ 水  
 立伸て さくや 田中の 森の花  
 ひと 日よを 日花に や 酔はむ 放し鳥  
 ちる 花や 法師の よめる 歌のさま  
 駕籠 舁にあく いせら ちるや 花  
 果加 ある 花や 麓に せ 一社



七富く花の彌生ハ御殿山  
 餅屋とて障れもあらす花盤  
 余所くし馬上あからの花見顔  
 散花の影が流れの底の鮎  
 案内子の雲に礫や花のやま  
 枝折の花やくらまの馬便  
 繁書に花あよこしそ因舎人  
 ひくや花植木車は誰あめ  
 さかり哉花の園あす細屋鋪  
 山くくに日裏日おとて花くまり  
 さほ姫のよき物好や花に虹  
 花さかり佛にあらぬ木々もあし

一陽井藏板

江戸室町三丁目

吉林 須原屋市兵平



